

「新精選古典文法 三訂版」内容解説資料

この資料は、一般社団法人教科書協会「教科書発行者行動規範」に則っております。

東京書籍「新精選古典文法 三訂版」—「精選古典探究 新版」関連表

※「新精選古典文法 三訂版」の例文(練習問題を含む)のうち、「精選古典探究 新版 002-902」から採録した例文の一覧。教科書の単元順に、「新精選古典文法 三訂版」と、教科書での掲載箇所をそれぞれ示した。



I 部

2 歌物語

伊勢物語

[初冠]

文法書	例文	教科書
P43	その里に、いとなまめいたる女はらから住みけり。この男、垣間見てけり。	P22L2
P155	ついでおもしろきことともや思ひ()。	P23L1
P157	春日の里に領るよして、狩りにいにけり。	P22L1
P164	昔、男、初冠して、	P22L1

[狩りの使ひ]

文法書	例文	教科書
P155	されど、人目しげければ、えあはず。	P25L7

[小野の雪]

文法書	例文	教科書
P80	比叡の山の麓なれば、雪いと高し。	P28L6
P122	親王、大殿籠らで明かし給うてけり。	P28L2
P128	馬頭なる翁つかうまつれり。	P27L1
P159	大御酒賜ひ、禄賜はむとて、	P27L3

[つひにゆく道]

文法書	例文	教科書
P40	つひにゆく道とはかねて聞きしかど昨日今日とは思はざりしを	P29L2
P150	わづらひて、心地死ぬべくおぼえければ、	P29L1
P164	つひにゆく道とはかねて聞きしかど	P29L2

3 随筆1

枕草子

[九月ばかり]

文法書	例文	教科書
P36	軒の上などはかいたる蜘蛛の巣のこぼれ残りたるに、	P36L3
P82	人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじうをかし。	P36L7
P154	露の落つるに、枝うち動きて、人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじうをかし。	P36L7
P168	人も手触れぬに、ふと上さまへ上がりたるも、いみじうをかし。	P36L7

[すさまじきもの]

文法書	例文	教科書
P45	方違へに行きたるに、あるじせぬ所。	P37L4
P157	「殿は何にかならせ給ひ()。』	P38L15

[中納言参り給ひて]

文法書	例文	教科書
P43	「これは隆家が言にしてむ。」とて、笑ひ給ふ。	P40L6
P69	「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」	P40L5
P73	「さては、扇のにはあらで、くらげのななり。」	P40L5
P158	おぼろけの紙はえ張る()ば、	P40L2
P158	「一つな落とし()。』	P40L8
P185	「一つな落としそ。」と言へば、いかがはせむ。	P40L8

[雪のいと高う降りたるを]

文法書	例文	教科書
P48	御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。	P41L3
P101	「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」	P41L2
P125	例ならず御格子参りて、	P41L1
P161	雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、炭櫃に火おこして、物語などして集まり候ふに、「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」と仰せらるれば、御格子上げさせて、御簾を高く上げたれば、笑はせ給ふ。	P41L1 ~ L3
P170	「少納言よ。香炉峰の雪いかならむ。」	P41L2
P187	雪のいと高う降りたるを、例ならず御格子参りて、	P41L1

4 軍記物語

平家物語

[忠度の都落ち]

文法書	例文	教科書
P54	「三位殿に申すべきことあつて、忠度が帰り参つて候ふ。」	P46L9
P149	「遠き御守りでこそ候はんずれ。」	P47L10
P159	おろかならぬ御事に思ひ参らせ候へども、	P47L2

[壇の浦の合戦]

文法書	例文	教科書
P149	「我と思はん者どもは、寄つて教経に組んで生け捕りにせよ。」	P53L13

建礼門院右京大夫集

[この世のほかには]

文法書	例文	教科書
P149	「光源氏の例も思ひ出でらるる。」	P56L5

5 随筆2

方丈記

[安元の大火]

文法書	例文	教科書
P18	あるいは煙にむせびて倒れ伏し、あるいは炎にまぐれてたちまちに死ぬ。	P60L9
P18	一夜のうちに塵灰となりき。	P60L3
P169	あるいは炎にまぐれてたちまちに死ぬ。	P60L9

徒然草

[悲田院の堯蓮上人は]

文法書	例文	教科書
P47	吾妻人こそ、言ひつることは頼まるれ、	P62L2
P148	「(都の)人の心劣れりとは思ひ侍らず。」	P62L4

[世に従はん人は]

文法書	例文	教科書
P25	夏果てて、秋の来るにはあらず。	P64L6

[あだし野の露消ゆる時なく]

文法書	例文	教科書
P78	長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、めやすかるべけれ。	P66L4
P148	夏の蟬の春秋を知らぬもあるぞかし。	P65L3
P149	住み果てぬ世にみにくき姿を待ちえて、何かはせん。	P66L3
P155	命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。	P65L3
P156	命あるものを見るに、人ばかり久しきはなし。	P65L3
P156	飽かず、惜しと思はば、千年を過ぐすとも、一夜の夢の心地こそせめ。	P66L2
P157	もののはれも知らずなりゆくなん、()。	P66L8

[花は盛りに]

文法書	例文	教科書
P32	たれこめて春の行方知らぬも、なほあはれに情け深し。	P67L1
P43	「この枝、かの枝散りにけり。」	P67L6
P60	殊にかたくななる人ぞ、「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」などは言ふめる。	P67L6

P87	よろづのことも、始め終はりこそをかしけれ。	P67L8
P88	月は隈なきをのみ見るものかは。	P67L1
P99	心あらん友もがなと、都恋しうおぼゆれ。	P68L1
P148	咲きぬべきほどの梢、散りしをれたる庭などこそ、見どころ多けれ。	P67L2
P156	花は盛りに、月は隈なきをのみ見るものかは。	P67L1
P156	歌の詞書にも、「花見にまかれりけるに、早く散り過ぎにければ」とも、	P67L3
P167	「この枝、かの枝散りにけり。今は見どころなし。」	P67L6
P168	「この枝、かの枝散りにけり。」	P67L6

6 日記1

更級日記

[門出]

文法書	例文	教科書
P46	額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。	P75L4
P61	「京に疾く上げ給ひて、物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」	P74L7
P117	「物語の多く候ふなる、ある限り見せ給へ。」	P74L8
P125	薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、	P75L4
P133	身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、	P74L8
P135	薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、	P75L4
P157	あづまぢの道の果てよりも、なほ奥つ方に生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばやと思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉、継母などやうの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしきまされど、わが思ふままに、そらにいかでかおぼえ語らむ。	P74L1 ~ L6
P157	日の入り際の、いとすぐ霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ、額をつきし薬師仏の立ち給へるを、見捨て奉る、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。	P74L11

[物語]

文法書	例文	教科書
P64	紫のゆかりを見て、続きの見まほしくおぼゆれど、人語らひなどもえせず。	P76L2
P77	これを見るよりほかのことなければ、	P77L2
P82	母、物語など求めて見せ給ふに、げにおのづから慰みゆく。	P76L1
P93	引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。	P76L14
P97	「いとうつくしう生ひなりにけり。」など、あはれがり、めづらしがりて、	P76L8
P100	我はこのごろわろきぞかし、	P77L5
P115	「何をか奉らむ。」	P76L9
P146	夢に、いと清げなる僧の、黄なる地の袈裟着たるが来て、「法華経五の巻を疾く習へ。」と言ふと見れど、	P77L3

P167	かたちも限りなくよく、髪もいみじく長くなりなむ、	P77L6
------	--------------------------	-------

蜻蛉日記

[なげきつつひとり寝る夜]

文法書	例文	教科書
P187	さればよと、いみじう心憂しと思へども、	P78L9

7 作り物語1

源氏物語（一）

[光源氏の誕生]

文法書	例文	教科書
P29	取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、	P83L8
P30	同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。	P82L3
P32	いよいよ飽かずあはれなるものに思ほして、	P82L6
P43	楊貴妃の例も引き出でつべくなりゆくに、	P82L10
P72	いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。	P82L1
P77	同じほど、それより下臈の更衣たちはましてやすからず。	P82L3
P82	急ぎ参らせて御覧ずるに、めづらかなる児の御かたちなり。	P83L14
P95	世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。	P83L12
P96	朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、	P82L4
P97	取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、	P83L8
P127	疑ひなき儲けの君と、世にもてかしづき聞こゆれど、	P84L1
P129	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P82L1
P135	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P82L1
P139	前の世にも、御契りや深かりけむ、世になく清らなる玉の男皇子さへ生まれ給ひぬ。	P83L11
P160	いづれの御時にか、女御、更衣あまた候ひ給ひける中に、	P82L1
P162	いとやむごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。	P82L1
P163	取り立ててはかばかしき後ろ見しなければ、	P83L8
P185	いつしかと心もとながらせ給ひて、	P83L13

[若紫]

文法書	例文	教科書
P34	「いで、あな幼や。」	P86L13
P34	「梳ることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。」	P88L4
P60	簾少し上げて、花奉るめり。	P85L10
P69	少しおぼえたところあれば、子なめりと見給ふ。	P86L6
P72	「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」	P86L7
P75	「いづ方へかまかりぬる、いとをかしうやうやうなりつるものを。」	P86L10

P76	「何ごとぞや。童べと腹立ち給へるか。」	P86L6
P81	「梳ることをうるさがり給へど、をかしの御髪や。」	P88L4
P82	「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」	P86L14
P83	簾少し上げて、花奉るめり。	P85L10
P85	「伏籠のうちに籠めたりつるものを。」	P86L8
P87	烏などもこそ見つけ	P86L10
P88	「童べと腹立ち給へるか。」	P86L6
P97	「今日しも端におはしましけるかな。」	P88L14
P98	かの人の御代はりに、明け暮れの慰めにも見ばや、	P89L9
P117	かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。	P85L8
P127	「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」とて、	P86L14
P130	「源氏の中将の、瘡病まじなひにもし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。」	P88L15
P131	「この世にののしり給ふ光源氏、かかるついでに見奉り給はむや。」	P89L3
P135	「源氏の中将の、瘡病まじなひにもし給ひけるを、ただ今なむ聞きつけ侍る。」	P88L15
P137	清げなる大人二人ばかり、さては、童べぞ出で入り遊ぶ。	P86L1
P139	ねびゆかむさまゆかしき人かな、と目とまり給ふ。	P88L1
P154	かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。	P85L8
P154	「雀の子を犬君が逃がしつる、伏籠のうちに籠めたりつるものを。」	P86L7
P154	いと口惜しと思へり。	P86L8
P155	「いとあやしきさまを人や見つらむ。」とて、	P89L2
P156	あはれなる人を見つけるかな、	P89L6
P158	「いで、あな幼や。」	P86L13
P162	「雀の子を犬君が逃がしつる。」	P86L7
P166	少しおぼえたるところあれば、子なめりと見給ふ。	P86L6
P169	明け暮れの慰めにも見ばや、	P89L9
P171	「罪得ることぞと常に聞こゆるを、心憂く。」	P86L14

8 歴史物語1

大鏡（一）

[道真の左遷]

文法書	例文	教科書
P49	明石の駅といふ所に御宿りせしめ給ひて、駅の長のいみじく思へる気色を御覧じて、作らしめ給ふ詩、いと悲し。	P96L15
P159	御前の梅の花を()て、	P96L3
P187	さるべきにやおはしけむ、右大臣の御ためによからぬこと出で来て、	P95L8

[花山天皇の出家]

文法書	例文	教科書
P66	大臣にも、変はらぬ姿いま一度見え、かくと案内申して、	P102L12
P115	春宮の御方に渡し奉り給ひてければ、	P101L4
P126	東さまに率て出だし参らせ給ふに、	P102L3
P154	土御門より東さまに率て出だし参らせ給ふに、	P102L3
P158	まだ帝出でさせおはしまさ()けるさきに、	P101L3

9 詩歌

八代集の世界

文法書	例文	教科書
P43	うたた寝に恋しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき [古今和歌集]	P108L7
P165	うたた寝に恋しき人を見てしより [古今和歌集]	P108L7

歌論

[古今和歌集仮名序]

文法書	例文	教科書
P45	生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。	P117L3
P76	生きとし生けるもの、	P117L3
P88	生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける。	P117L3
P90	いづれか歌を詠まざりける。	P117L4

Ⅱ部

2 日記2

和泉式部日記

[夢よりもはかなき世の中を]

文法書	例文	教科書
P158	「かかること、ゆめ人に言ふな。」	P153L11

3 作り物語2

源氏物語（二）

[なにがしの院]

文法書	例文	教科書
P46	物に襲はるる心地して、おどろき給へれば、	P161L7
P148	物に襲はるる心地して、おどろき給へれば、灯も消えにけり。	P161L7
P185	「夜の声はおどろおどろし。あなかま。」	P164L9
P185	さこそ強がり給へど、若き御心にて、言ふかひなくなりぬるを見給ふに、	P164L3
P187	汗もしとどになりて、我かの気色なり。	P161L13

[須磨の秋]

文法書	例文	教科書
P53	行平の中納言の「関吹き越ゆる」と言ひけむ浦波、	P169L9
P76	沖より舟どものうたひののしりて漕ぎ行くなども聞こゆ。	P170L11
P148	今宵は十五夜なりけりと思し出でて、	P171L11

[宇治の姫君たち]

文法書	例文	教科書
P155	霧の深ければ、さやかに見ゆべくもあらず。	P189L8

4 歴史物語2

大鏡（二）

[三船の才]

文法書	例文	教科書
P121	入道殿、「かの大納言、いづれの船にか乗らるべき。」とのたまはすれば、	P196L3
P149	入道殿の大井川に逍遥せさせ給ひしに、	P196L1

[肝試し]

文法書	例文	教科書
P27	影だに踏むべくもあらぬこそ	P198L4
P54	「わが子どもの、影だに踏むべくもあらぬこそ口惜しけれ。」	P198L4
P147	「さあらむ所に一人()むや。」	P199L3
P147	四条大納言のかく何事もすぐれ、めでたくおほしますを、	P198L1
P150	帝、さうざうしとや思し召しけむ、	P198L13
P150	「ただにて帰り参りて侍らむは、証候ふまじきにより、」	P201L7
P155	「今宵こそいとむつかしげなる夜なめれ。」	P199L1

[道長、伊周の競射]

文法書	例文	教科書
P80	「摂政、関白すべきものならば、この矢当たれ。」	P204L5
P80	中心には当たるものかは。	P203L12
P98	「何か射る。な射そ、な射そ。」	P204L11
P124	帥殿の、南院にて人々集めて弓あそばししに、	P203L5
P147	延べさせ給ひけるを、やすからず思しなりて、	P203L9
P160	帥殿の、南院にて人々集めて弓あそばししに、この殿渡らせ給へれば、思ひかけずあやしと、中関白殿思しおどろきて、いみじう饗応し申させ給うて、下臈におはしませど、前に立て奉りて、まづ射させ奉らせ給ひけるに、帥殿の矢数いま二つ劣り給ひぬ。	P203L5 ~L8

[大納言殿参り給ひて(枕草子)](〈言語活動〉伊周の人物像を読み比べる)

文法書	例文	教科書
P62	御前なる人々、一人二人づつ失せて、	P206L5

[隆家と道長]

文法書	例文	教科書
P123	さし置かれつる杯取り給ひてあまた度召し、	P209L8

5 評論

俊頼髓脳

[鷹狩りの歌]

文法書	例文	教科書
P150	まことにもおもしろかりけむとおぼゆ。	P213L5

無名抄

[おもて歌のこと]

文法書	例文	教科書
P125	俊恵言はく、「五条三位入道のみもとにまうでたりしついでに、」	P214L1
P129	「これをなむ、身にとりておもて歌と思ひ給ふる。」	P214L5
P134	「これをなむ、身にとりておもて歌と思ひ給ふる。」	P214L5
P149	それをば用ゐ侍るべからず、	P214L3

10 古典の注釈

小倉百人一首の注釈を読む

文法書	例文	教科書
P35	瀬をはやみ岩にせかるる滝川のわれても末にあはむとぞ思ふ [出典は詞花集]	P278L15